



ビット89ニュースINTEREST

株式会社 ビット89
東京都品川区大井1-6-3 アゴラ大井町ビル7F (〒140-0014)

2010年2月号
(隔月発行)

ハイライト:今回のテーマは

「潮流を掴む
Part1」

インフォシェフ

吉田健司のBusiness Insight(見識・洞察)

「定点観測基地による潮流変化の掴み方」

Business Insight

「定点観測基地による潮流変化の掴み方」

The 特集

潮流変化の読み方は?

Brain89ers

五感フル活用による社会ニーズの発掘と啓蒙

目次:

	ページ
Business Insight	1
The 特集	2
気になるデータ	2
Brain89ers	3
お知らせ & トピックス	4
「サテライト・マンズリー」のご案内	4
ビット89 インフォメーション	4

「経営とは何か?」という問いに対し、私は「社内にある限られた経営資源(ヒト・モノ・カネ等)を最大限に活用し、継続的に利潤を生み出していくように考え、行動していくこと」と定義づけている。では、その経営責任を担う経営者にとって「企業を持続成長させていくためのミッションは何か?」という問いに対しては、「目の前の課題だけでなく、中長期的視点に立った課題の解決に取り組むこと」と答える。ここで中長期的視点に立った課題とは、「事業環境の潮流変化を見抜き、適切な手立てを打つこと」となる。

具体的に時代の潮流変化を察知するには、やはり速報性・信憑性・多面性ある情報収集体制が必須ではないだろうか?

自社あるいは自社の事業を取り巻く外部環境の変化を迅速・的確に把握し、その中で会社全体や事業に影響を与えそうな事象に気づき、その将来動向を予測しながらどのような手だてを打つべきかを考えることが安定経営の要件である。では外部環境変化を察知するにはどうしたらよいか。それは流れの基軸(変化要因)となるものについて“定点観測”していくことである。私は、外部環境を大きく「マクロ環境」と「ミクロ環境」の二つに分けて情報収集ことにしている。前者については「政治的(Political)要因」「経済的(Economic)要因」「社会的(Social)要因」「技術的(Technological)要因」の4要因、後者については「販売先(Market)要因」「競合先(Competitor)要因」「調達先(Raw material)要因」の3要因、合計7要因が環境変化を読み取る“定点観測基地”である。私はこれらの基地から得られる情報を時系列的に整理し、現状・近未来情報と中長期情報に分類・整理して変化を観測するようにしている。

マクロ環境分析については4要因の頭文字をとってPEST分析と呼ばれているが、ミクロ環境分析の3要因については一般的に確立した名称がないので、私はPESTと同様に頭文字をとってMCR分析と名づけている。

以上7要因の時系列動向変化から大きな“潮流”を読み取り、ある程度の将来予測をすることは可能である。気温、風向き、風力、降水量といった気象データから天気予報がある確率で可能なように、ビジネス界の外部環境変化についても上記のマクロ・ミクロ7要因を定点観測基地とすることで、読み取ることが可能となる。もちろん、その予測精度や戦略策定へ



の活用効果は業界特性や個人の情報収集センスによって異なってくる。

PEST分析・MCR分析のほかに、潮流変化を察知するためのお手軽な方法もあるのでご紹介しよう。まずお金もかけずに簡単にできるのは、ある程度の規模の書店を自分の定点観測基地として、その書店に定期的(例えば2週間に一度)に立ち寄ってみることである。一般にビジネス関連の出版社はそのときに話題になっていることやこれから話題になりそうなテーマを先取りした書籍を企画し出版するので、書店で平積みされている書籍のタイトルを眺めるだけで、時代の潮流が読み取れるからである。次にお勧めの方法は、ビジネス関連のテレビ番組(例えば、「ガイアの夜明け」「クローズアップ現代」など)の中からお気に入りのものを定点観測基地として選択し、それを毎回視聴することである。重要と思われるテーマや企業動向は他の番組でも取り上げられることが多い。さらに、知人友人との飲み会情報なども有効な定点観測の情報基地となる。ただし、折角の情報も飲み過ぎるとフラッシュメモリーのごとく消失してしまうこともあるので、ご用心。

なお、弊社では、「サテライト・マンズリー」という月次定点観測レポートを会員企業向けに提供している。ご興味ある方は是非お問い合わせを!(4P「サテライト・マンズリー」のご案内)をご参照ください。)

この文章の無断転載を禁じます。

THE 特集 潮流変化の読み方は？

時代の潮流変化を見逃してしまうと、致命的な判断ミスを犯すことにもなりかねない。どのようにして変化を察知するのか？一定の周期で世の中が大きく変わるという考え方がある。時代の波を読むためのヒントとして、いくつかの説をみてみよう。

2010年は変革の年？

1月4日付の日経産業新聞は、日本の経営史を振り返ると、300年前には「おカネ」、200年前には「モノ」、100年前には「ヒト」、と100年ごとに変革があったと指摘し、「2010年 歴史的変革の予感」という見出しを掲げた。

[300年前:おカネ]1710年、三井グループの源流である三井家が一族の財産を一括管理する「大元方」という組織を設け、資本重視という新しい事業システムが考案された。

[200年前:モノ]文化文政期、商品経済が発達し、農村に貨幣建材が広がるのに伴い、物資を関西から調達していた関東でも関西に頼らない内製化が進んだ。その結果、モノの流れの変革が起き、振興商人が台頭、既存勢力への脅威となった。

[100年前:ヒト]1910年、小平浪平が日立製作所を創業。小平は「日本的経営」の重要な要素である社員の一体感を育む数々の施策を導入し、日立を成長させた。

次の100年について、本記事では、「カネ」「モノ」「ヒト」の次は第4の経営資源の「知識」や「情報」だろうかとした上で、「マネジメント=組織の統制」という間違った受け取り方がされる傾向にある日本企業の経営において、「管理」主義が一掃できれば、100年に一度の企業変革に値する、と述べられている。2010年を機に日本企業の経営に対する姿勢が変わっていくか？

今は離陸の時か？

博報堂生活総合研究所が2000～05年頃に提唱した「15年周期説」というものがある。15年をひとつの区切り(期)とし、「パラダイム変革期」「離陸期」「量的拡大期」「質的深化期」という4つの15年からなる60年をひとつの時代とみると、明治維新以降の日本の社会変化が見えやすいというもの。

はじめの60年は明治から昭和初期(1870～1930年)。明治維新が第一の「パラダイム変革期」に当たり、日本は「産業インフラの発展期」を迎える。次の60年は1930～1990年。昭和初期～太平洋戦争を第二の「パラダイム変革期」として、戦後は「ハード モノ 経済の発展期」となる。そし



て、1990～2005年がバブル崩壊を発火点とする第三の「パラダイム変革期」で、続く2005～2020年は「ソフト 情報 経済の発展期」の「離陸期」に当たる。博報堂生活総研では、この第三の「離陸期」のキーワードとして、少子高齢化、階層化、アジア化、端末化(携帯端末の重要性アップ)、電子五感化(バーチャルな五感と脳メカニズムへの関心)、アナログ化(デジタル化への反動)、統合化(社会をどうまとめていくかの議論が活発化)という7つの潮流⁽¹⁾を挙げている。今年「離陸期」を3分の2ほど過ぎたところということになる。

10年ひと昔

日経エレクトロニクス誌⁽²⁾は、コンピュータ業界では、おおむね10年に1度の割合で、新たなコンピューティング・パラダイムが提唱されると分析。1971年、世界初のマイクロプロセッサが誕生し、70年代はメインフレームの時代に、80年代はワークステーションの開発が活発化し、90年代になると、エンジニアなどを中心にコンピュータの個人利用が進み、さらにパソコンの登場と低価格化により、一般のオフィスにおいても一人一台のコンピュータ使用が定着する。2001年頃には、「いつでも、どこでも」コンピュータを使える「ユビキタス社会」が目標とされ、この10年は生活に密着した情報機器の開発が進んだ。同誌では今後はパソコン以外の情報機器も巻き込みながら新たなコンピューティング・パラダイムが誕生するだろうと予測するとともに、それに向けた戦略のひとつとして、Googleのクラウド・コンピューティングを挙げている。2010年代はどのような言葉で語られる10年になるだろう？

(1)生活新聞(博報堂生活総合研究所)2005年1月27日号
(2)日経エレクトロニクス 2009年3月30日号

関連用語

景気循環:

景気が一定の周期で「拡張 後退」もしくは「回復 好況 後退 不況」を繰り返していること。よ(知られたものとして次の4つが主張されており、発見者・解明者の名前がつけられている。

[周期 起因]

- A. キチンの波
約40カ月 在庫変動
- B. ジュグラーの波
約10年 設備投資
- C. クズネットの波
約20年 建設投資
- D. コンドラチェフの波
約50年 技術革新

気になるデータ 時代の潮流:アジアシフト関連データ

英法律事務所ノートン・ローズが金融機関に所属する125人を対象に行った調査
(実施時期:2009年10～11月 出所:ノートン・ローズ ニュースリリース 2010年1月18日)

経済力が恒久的に西から東にシフトすると回答:68%

ボーイング社による世界の航空旅客市場予測
(出所:The Boeing Current Market Outlook 2009-2028)

世界の航空旅客市場におけるアジア太平洋地域のシェア
2009年 32% 2028年 41%

Brain89ersの視点 五感フル活用による社会ニーズの発掘と啓蒙

玉越 直人 (たまこし・なおと) [株式会社WAVE出版 代表取締役社長]

われわれ出版人はよく「感性の職業」といわれるが、私はそれ以上に「理念」の職業だと思っている。

WAVE出版は、たった一人で創業したが、「一冊の本は、一人の読者の人生を変える力をもつ」と固く信じて今まで歩んできた。つまり、書籍ジャーナリズムを貫き、社会を変えることをミッションと考えている。

週刊「東洋経済」(2010年2月20日号)が「新聞・テレビ断末魔」と特集したが、巨大マスコミは、記者クラブなどの既得権や広告収入に依存しており、権力の監視役というより、「第4の権力」に成り下がってしまったことが読者・視聴者離れを呼んだ。

私はだからこそ、自由でニュートラルなメディア、書籍こそ、勝負どころだと思う。

そのために、社員たちと共に、以下の3つを肝に銘じて日々奮戦している。

- 1 全国あらゆる方々と本との出会いを創出する
- 2 常に新テーマ発掘、著者開拓に努める
- 3 次代に読み継がれる質の高い本を作る

換言すれば、老若男女問わず、一生に一度でよいから、小社の本と出会っていただきたいので、あらゆるジャンルの本を企画する。他社で手垢のついた著者ではなく、デビュー作を出す。50年後の世代にも読んでもらえるロングセラーを作る。これが絶対命題。

その著者開拓・企画立案のためには、「社会を見る眼」が一番大切だが、あくまで、われわれは「読者代表」に過ぎないから、その視点は低ければ低いほどいい。

したがって、私が会うのは「市井の方々」。出版とまったく関係のない方、異業種の方が

圧倒的に多い。「世が世なら…」などと現実逃避するマスコミ人や、傲慢な机上の空論派などと会っても、まったく時間の無駄。

ともかく時間の許す限り、本音で生きる方々にお目にかかりお話することから、この日本社会で本当に求められているテーマが見えてくる。

最近、パソコンにしがみついたらばかりいる編集者が多くなったが、いつでも誰でもが同様に見られる情報に頼るのではなく、自分の眼で、耳で、鼻で、つまり「五感」をフル回転で駆使しなくてはならない。

書籍というものは「活字」で組まれているから「活字文化」といわれるが、すべて人間の言葉の集積であり、著者という人間そのものだから当然である。

それを胸に、未知なる著者と読者の新たな出会いを生むため、今日も新たな人に会う。



玉越 直人 氏プロフィール
1952年東京生まれ。大学卒業後、出版社に勤務。雑誌編集部、書籍編集部等勤務を経て、1987年にWAVE出版創立、代表取締役社長に就任。現在に至る。子どものいじめ問題解決を目指すNPO法人「ジェントルハート・プロジェクト」の創立理事、(財)社会教育協会理事などを勤める。

“Brain89ers”とは...

ビット89には、さまざまな分野で活躍する豊かな才能・個性を持った方々のネットワークがあります。このネットワーク、“Brain89ers”(ブレイン・エイティナイナーズ)の知性を共有することにより、皆さまのビジネスはより深く広く、味わい深いものとなります。そこで、毎号これらの方々に登場していただき、独自の視点からビジネスや社会・世界情勢について語っていただきます。



BIT89 Book Guide

1.その先が読めるビジネス年表

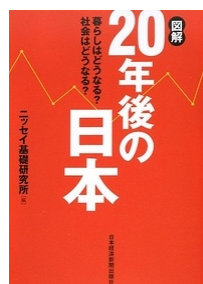
「日本経済」「グローバル経済」「産業の盛衰」「技術革新」「経営」「IT」「資源と環境」「雇用」「教育」「家族」の10分野について、わかりやすく大きな流れを解説した一冊。
「日本の論点」編集部著
(株)文藝春秋刊
1,400円 税込
ISBN: 9784163715100



2.図解20年後の日本

～暮らしはどうか？ 社会はどうか？～

人口減少、地球温暖化、雇用、年金、医療、教育など私たちの生活を取り巻く未来の姿を、豊富なデータで徹底予測した書。
ニッセイ基礎研究所 著
日本経済新聞社 刊
1,800円 税込
ISBN: 9784532353704



3.21世紀の歴史

～未来の人類から見た世界～

ヨーロッパ最高の知性と称されるアタリが、長年の政界・経済界での実績、研究と思索の集大成として「21世紀の歴史」を大胆に見通した一冊。ヨーロッパでベストセラー。
ジャック・アタリ著
(林昌宏訳)
新人物往来社 刊
2,520円 税込
ISBN: 9784861821950





月刊誌「中小企業と組合」に寄稿

(財)中小企業情報化促進協会が発行している月刊誌「中小企業と組合」2010年2月号では、「人材と教育」を特集テーマに掲げており、その特集記事のひとつとして拙文を寄稿しました。「人材育成の普遍性と現場における今日の対応事例・課題」というタイトルで、主に、ヒトが単なるコスト要因ではなく、個人の成長が企業の成長につながるという点で重要な経営資源であることを再確認した上で、リーダー養成等への人材教育投資のあり方を紹介しました。なお、本稿は弊社が開発した論文・レポート作成用の章立て形式であるDBMAPを使用し執筆しました。

- 第1章：人材育成の意義と重要性
- 第2章：人材育成がより一層重視されてきた背景
- 第3章：人材育成の取り組み姿勢と方法
- 第4章：具体的参考事例
- 第5章：課題と今後の展望

上記論文は弊社の下記サイトからでもご覧いただけます。(PDF形式)
http://www.bit89.co.jp/library/book_magazine.html

「DBMAP」とは、ビット89が開発した論文・レポート作成用の章立て形式で、次の5章から構成されています。

D(Definition = 定義)、B(Background = 背景)、M(Main contents = 本論)、A(Actual case = 事例)、P(Points of advice = 課題・展望)

定点観測レポート「サテライト・マンスリー」のご案内

「サテライト・マンスリー」は、毎月1回、企業経営に関わる6分野、「A分野：組織体制・人財育成」「B分野：技術・情報・生産物流」「C分野：事業展開・財務管理」「D分野：景気動向・事業環境」「E分野：グローバル戦略・海外情勢」「F分野：その他 経営戦略情報」と、お客さまが個別に指定できる1分野について、新聞・雑誌の文献情報を提供する定点観測レポートです。



サテライトマンスリー「今月のキーワード」1月・2月

	2010年1月	2010年2月
A分野 (組織体制・人財育成)	・不況期の人材育成 ・ジョブレス・リカバリー	・魂リーダーシップ ・労使関係特別委員会
B分野 (技術・情報・生産物流)	・クラウド競争時代 ・EMSの進展	・ツイッター活用 ・安全イノベーション
C分野 (事業展開・財務管理)	・品質工学 ・内製化推進	・GOP重視経営 ・CREマネジメント
D分野 (景気動向・事業環境)	・スマター・プラネット ・派遣禁止対応	・2010年問題 ・労働者派遣制度
E分野 (グローバル戦略・海外情勢)	・新興国モデルの拡大 ・2010年のユーロ圏	・APECアジア中小大学校 ・日越EPA
F分野 (その他 経営戦略情報)	・中小向け製品表彰制度 ・銀河系経営	・ダボス会議 ・中小向けM & A仲介

*今月のキーワード = ビット89が独自の視点で抽出した注目トピックス

ビット89インフォメーション

発売中の書籍内容に沿ったテーマだけでなく、最新のビジネスメソッドに関する講演、セミナーのご依頼に積極的に応えたいします。また、併せてマーケティングリサーチ、各種ビジネストレーニングおよび経営コンサルティングなどに関するお問い合わせなどは、左記までお気軽にご連絡くださいませ。

皆様の会社が、現在抱えておられるビジネス上の課題を解決してみませんか？ 弊社代表 吉田健司が「経営プラネット」および「ビギナー会員(体験会員)」の皆様を対象に、毎月先着5名様まで頂いた質問にEメールまたはFAXにてご返答いたします。ご希望の方は左記のEメールアドレスまたはFAX番号宛にご質問内容をお送りください。

INTEREST編集部では、INTERESTで特集を組んでほしいテーマを募集しております。左記のメールアドレスより編集担当宛に御社名とお名前を明記の上、お寄せください。

株式会社 ビット89
 東京都品川区大井1-6-3
 アゴラ大井町ビル7F (〒140-0014)
 03(3774) 8950
 Fax 03(3774) 8951
 メール info@bit89.co.jp
 HP <http://www.bit89.co.jp>
 発行責任者 吉田 健司